

文學教育のめやすとして

長谷川孝士

一
新しい観点からの文学教育の必要を説く声は、すでに大き

くなっている。ところが、どのような「文学書」を読ませるのが、文学教育の目標を適切に、有能に果たし得るのかとい

う面の、たちいった、具体的な考慮が多くはらわれていない。
5。

どのような文学書を、いかに読ませたらよいか、というところを、生徒児童の能力と興味とから離れて、抽象的に考えてみても、なんにもならないだろう。

この、わたしの調査は、中学生たちが、「なにを読んでいるか」そして、「いかに読んでいるか」を調べることによって、かれらの能力と興味とにかなった「文学書」をつかまえて、文学教育のめやすとしようという意味をもつものにほかならない。

二

この調査は、次のような配慮と手続きのもとになされたものである。

- 1 夏休暇の宿題として、読書してこること。
- 2 読書は文学書に限ること。(ただし、「いわゆる」小説」とし、詩歌などは、これから除外する。)
- 3 日本のものでも、外国文学の翻訳でもよい。
- 4 次のような内容の読書ノートを書くこと。

a 書名・作者名

b 経路(なぜその本を読むにいったか。すなわち、「父母からすすめられたから」とか、「家にあったから」とか。)

c 梗概
d 感想・批評

5 対象は、中学校二年生男女合計一二七名の生徒。

さらに、この調査は次のような限界をもっている。

すなわち、これは、中学生の読書生活の全領域にわたったものではないということ。いわゆる文学少年・文学少女はきわめて少なく、文学書と称するものを、平素、教課外に読むことの全然ない生徒も多い。科学書から漫画に至る広範な領域にわたる読書生活の調査は、ここでは、全く問題にしていない。

それと、最初から「文学書を読んでこい」という要求が出されているので、平素の読書の領域と水準とから、かなりかけ離れたものを読んでいる場合が多い。「先生の要求」にこたえようとする、よほど固くなった姿勢で読まれており、「すぐれた文学書」という概念にとらわれながら、選択しているものが多いこともみのがすわけにはいかなない。

こうした限界をもちながらも、ともかく、生徒たちが読んできたものは、どんなものであったか、そして、かれらは、それをどのように読んでいるかを調べることは、なお、大きな意義をもつものと確信する。

また、ここに発表したのは、日本文学にのみ限定した。これ以外に、外国文学の翻訳あるいはダイジェスト的なものなど、一三八篇(同一作品がいくつかあるのを延べて)読ま

れているが、これは、今回は除外して発表する。結局、生徒たちは、日本文学三九三篇、合計、延べ五三一篇、一人平均四篇の「文学書」を読んできたわけである。

第一表 作家別調査

三

																作	家					
永井荷風	中国木田	有田武郎	大岡昇平	林岡葵美子	川端康成	横光利一	鈴木三重吉	樋口一葉	森鷗外	井伏鱒二	菊池寛	志賀直哉	島崎藤村	宮沢賢治	武者小路實篤	山本有三	夏目漱石	芥川龍之介				
〇	〇	一	〇	五	〇	〇	〇	二	〇	六	五	五	五	五	一	五	八	七	二	六	五	五
三	三	二	四	〇	五	五	五	三	五	六	七	八	八	九	五	一	六	三	二	〇	四	六
三	三	三	四	五	五	五	五	五	二	二	三	三	四	〇	二	二	三	九	四	六	一	〇

宮本百合子	小川未明	小谷多喜二	谷崎潤一郎	秋田雨雀	里見綺堂	岡本綺堂	徳富花	石川啄木	幸田露伴	坪内逍遙	二葉四迷	池田政夫	増田治	吉田英夫	獅子文六	石坂洋次郎	岸田辰士	堀田辰雄	坪井誠治	梶井基次郎	下村湖太郎
〇	〇	一	〇	一	〇	一	〇	〇	〇	〇	一	一	二	一	一	〇	一	〇	〇	二	一
一	一	〇	一	〇	一	〇	一	一	一	〇	一	〇	一	一	二	一	二	二	〇	二	〇
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

合	作	篠	篠	福	山	佐	広	北	中	菊	阿	尾	吉	大	竹	尾
者	遠	原	田	岸	藤	瀬	村	山	田	山	田	崎	田	甲	次	道
不	喜	正	清	徳	一	正	寿	正	一	知	一	一	一	一	一	士
計	詳	人	咲	人	平	明	勝	夫	男	夫	二	雄	郎	郎	雄	郎
一	七	五	二	二	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
三	九	五	一	〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

幸福な家族

父

河童

グアコソドリの伝記

波

その妹

清兵衛と瓢箪

高瀬舟

文鳥

破戒

たけくらべ

猿

芋粥

沼地

どんぐりと山ねこ

恩讐の彼方に

銀の匙

本日休診

伊豆の踊子

真理先生

次郎物語

武者小路実篤

芥川 龍之介

芥川 龍之介

宮沢 賢治

山本 有三

武者小路実篤

志賀 直哉

森 鷗外

夏目 漱石

島崎 藤村

樋口 一葉

芥川 龍之介

芥川 龍之介

芥川 龍之介

宮沢 賢治

菊池 寛

中 勘助

井伏 鱒二

川端 康成

武者小路実篤

下村 湖人

一	一	〇	一	〇	二	三	一	三	二	〇	二	二	一	一	一	〇	二	三	三	一
二	二	三	二	三	一	〇	二	〇	一	三	一	二	三	三	四	二	一	一	一	四
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	四	四	四	四	四	四	四	五
三	三	二	一	三	二	一	一	三	二	二	二	二	三	四	一	三	三	三	四	四
〇	〇	〇	一	〇	〇	〇	二	〇	〇	一	〇	〇	〇	〇	〇	一	〇	〇	〇	〇
〇	〇	一	一	〇	一	二	〇	〇	一	〇	一	〇	〇	三	〇	一	一	〇	一	一
〇	〇	〇	〇	〇	二	〇	〇	一	〇	〇	一	二	〇	一	一	〇	二	〇	〇	一
〇	〇	一	二	〇	一	〇	一	〇	〇	一	一	〇	〇	〇	一	〇	〇	〇	〇	〇
三	二	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一
〇	〇	二	一	三	〇	三	〇	二	二	〇	一	〇	一	三	一	二	一	一	二	二
一	一	〇	〇	〇	〇	〇	二	〇	一	一	〇	一	二	〇	一	二	一	三	一	一

食堂

雲は天才である

桑の実

セロ弾きのゴーシュ

ツエねずみ

銀河鉄道の夜

なめとこ山の熊

虱

六の宮の姫君

子供の病気

点鬼簿

首の落ちた話

野呂松人形

孤独地獄

猪

或日の大石内蔵之助

正義派

城の崎にて

小さき者へ

クララの出家

順番

島崎 藤村

石川 啄木

鈴木 三重吉

宮沢 賢治

宮沢 賢治

宮沢 賢治

宮沢 賢治

芥川 龍之介

志賀 直哉

志賀 直哉

有島 武郎

有島 武郎

菊池 寛

一 〇 〇 〇 一 一 一 一 一 一 〇 〇 〇 〇 一 一 一 一 一 一 〇 一

〇 一 一 一 〇 〇 〇 〇 〇 〇 一 一 一 一 〇 〇 〇 〇 〇 〇 一 一

一 一

〇 〇 〇 〇 〇 一 〇 〇 〇 一 〇 〇 〇 〇 〇 一 一 一 一 一 〇 一

〇 一 〇 〇 一 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

一 〇 一 一 〇 〇 一 一 〇 一 一 一 一 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 一 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 一 〇 〇 〇 〇 一 一

〇 〇 一 一 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 一 〇 〇

〇 一 〇 〇 〇 〇 一 一 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 一 〇 〇 〇 一 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 一 〇 〇

一 〇 〇 〇 一 〇 〇 〇 一 〇 一 一 一 一 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

晩春の旅

榴櫓の棧三郎

鯉

芳兵衛

人工庭園

親鸞

宮本武藏(四)

俘虜記

武藏野夫人

野火

母

来宮心中

サランガの冒険

渡し守

盆踊り

鐘の鳴る丘

馬喰一代

白鳥の騎士

星はみている

竹取物語

義経記

井伏 鱒二

井伏 鱒二

井伏 鱒二

尾崎 一雄

阿部 知二

吉川 英治

吉川 英治

大岡 昇平

廣島一中二年生の父母

佐藤 一明

佐藤 一明

一 〇 〇 一 〇 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 〇 一 〇 〇 一 一 〇

〇 一 一 〇 一 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 一 〇 一 一 〇 〇 一

一 一 一 一 一 〇 〇 〇 一 一 〇 〇 一 〇 〇 一 一 一 一 〇 〇 一

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 一 一 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 一 一 一 〇 〇 一 一 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

一 〇 〇 〇 〇 一 一 一 〇 一 一 一 一 一 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 一 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 一 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 一

〇 〇 〇 一 〇 〇 〇 〇 一 〇 〇 〇 〇 〇 〇 一 一 一 〇 〇 〇

〇 一 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 一 一 一 〇

合 計	奥の細道・去来抄	弓張月	ぼくらはごめんだ	保元物語	よしつね物語	八犬伝	忠臣蔵	豊臣秀吉	坂本龍馬	真田幸村	山田長政	奴隸解放の先駆者	日本の科学者
	山岸 徳平	福田 清人	篠原 正映										
	篠遠 喜人												
一七五	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
二二〇	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
三九五	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
二六三	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
四七	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
八五	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
八六	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
六四	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
二八	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
一四六	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
七一	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

四

右の表の主だった作家と作品について、生徒たちの感想文をもとにしながら検討を加えてみよう。

○芥川龍之介

作家別にみた場合、圧倒的に芥川のものが多いということ
は、必ずしも、芥川のものがよくわかり、おもしろいという

ことを意味していない。むしろ、短篇の作品が大部分であるという理由があずかって大きいようだ。

「鼻」が二一名に読まれ、男女の比、あいなかばしている。そして、「おもしろかった」というものが一六名。この話が単に「こっけいな」だけではなく、「人の心をひきくって書いている」（男）と思ふ、「人間というものは、よくら

美しくなろうと思つて、美しくなつても、やはり本当の自分の体がよいものではないかと思う」(女)と結論するものもある。「人々は人が不幸な時におれば、その人を大変けなし、またその不幸な人が幸福になるとまたうらやましいことから、その人をけなすのだが、この文はそのありさまをうまく出していると思う」(男)だから、「不幸な人には親切にしなければならぬ」と私は思った」という者。「内供はなぜ心配な顔をしなかつたのだらう、僧の身でなどと考へないで、顔へあらわせばよかつたのに、そうすれば心配はなくなると思ひます」(男)「世間の人はたゞ自分の感情を外

に表わさないようにしている。日本人は特に。でもこういうことでも感情は外に出した方が良いと思う」(女)などと言つているものが多いのは、近代的自我をもつものの過剰な自尊心の理解が、いまだじゅうぶんできないことを物語っている。ただ、なんとなく、禅智内供の微細な心理の推移と陰影とに「自分と同様に、物事に神経質な人物」(男)を感じ、そこに自己の投影を見た者が一人あつた。

一般には、表面的なユーモアや諧謔を感じとるに終始しているが、すでに、ようやく自我意識の目ざめに当面しているか知らに、さだかではないが、人間の自我がもつ冷酷な姿に感じる芽がみえるのをみががすことができなかった。「破戒」を読んで、「丑松がなぜ生徒の面前で手をついてあやまらなければならなかつたのか、なぜ生徒にエタも同じ人間だ

と知らざないのか、このままでとにかく割り切れないものを感じます」(男)と、藤村のヒューマニズムの限界をまともに難詰するほどの生徒でさえも、「鼻」に示された、人間の幸福は相対的なものであり、「やはり本当の自分の体がよいものではないかと思う」ような、消極的な諦観的な姿勢を批判することができてゐる。

「蜘蛛の糸」「羅生門」が、ついで多く読まれてゐる。

「蜘蛛の糸」は、「自分さえよければよいという考へほど悪いことはな思ひます」(女)と思ふ、「ぼくが犍陀多だつたら、そのまましておくが、かれは、あんなことをおらぶから糸がきれたのだ」(男)「何でも自分だけの幸せを考へてはいけないと思う」(女)と、読みとつた者がほとんど全部。ただ、「人間のあさましい性質」(男)を見せつけられ、「私達の生活の中では、こんなことは珍しくないと思ふ。現に私もその一人である」(女)と書いた者がある。

「羅生門」は、「蜘蛛の糸」ほどにはおもしろく感じてゐないが、「人間といふものはなかなか信用する事ができない」(男)とする人間不信の思想は、まともに受けとられてゐる。ところが、「老婆の着物を引刺した下人は、老婆のいふことをすぐさまやつてしまふような男であるからろくでない」(女)として、否定的な立場をとるものは一人しかなく、あとは、「生活に困ればこんなことでもしなければならぬのかと思ふ」(女)もの、「こんな時代もあつたのかな

なあ。無理もないと思います」(男)と消極的に肯定する者が多かったのが目立つ。芥川ほどの絶望は、これら幼い生徒たちにはない。むしろ、こうした悪業が、「貧」を余儀なくした社会のせいであるから、世の中をよくすることにによって解決しようという考えを無意識のうちにもっている点をみのがすことができない。

「トロッコ」「杜子春」「父」「河童」もいくらか読まれている。しかし、「河童」は、おもしろかったと言っているわりに、その風刺が理解されていない。

要するに、芥川龍之介の文学が、大正末期から昭和初年にかけて、日本の小市民をとらえていた苦しく重く暗い空気のなかで、打開することもできず、ただ人間への不信と絶望とをもちたものであり、しかも、そうした苦悩を逆説的に、否定的に描くことによって人間の姿をえぐり出したという、そういう、よほど高度のものである。だから、中学生たちには難解である。難解ではあっても、右に見た如く、素朴にその文学を感得し、しかもかなり鋭い批判のまなこがいまみされるのであるから、これらを中学生に読ませることは、必ずしも無理ではないだろう。

○夏目漱石

「無理」という点では、漱石のものの方が芥川のものより「無理」をともなっている。芥川のものが、重々しい絶望的な苦悩の表現であれば、これは、東洋的な意味で、はるか

に健康であり、はるかに余裕を保っている。それにもかかわらず、漱石の方を中学生は理解しがたい。「坊ちゃん」が圧倒的人気をもって読まれている以外、他はあまり多く読まれず、読まれたとしても、「草枕」の如く、「よくわからなかったのおもしろくなかった」という者六人で一〇〇パーセントにあたる。この理由は、漱石の文体あるいは文章表現の抵抗である。読めない漢字、わからぬことばが、すでに現在の中学生に多すぎるようになっていくからである。

「吾輩は猫である」は、夏休み前の授業でその一部が教科書にあるので、扱ったものであり、大いに楽しく、その部分だけは読んだのである。それにもかかわらず、わずかに五名が読んだのみである。芥川のもは中学入学以来一度も扱ったこともなく、また紹介もしたことがない。(入学以来引きつづいてわたしが国語を担当している)それでいて、一〇一篇が読まれている事実と対比してみれば、漱石のものが敬遠されていることを知り得よう。

「坊ちゃん」

「とっても面白い小説で、思わず吹き出す所が何度もありました」「野だいこを思う存分こらしめたというハッピーエンドで終わった所が、僕にとって、ずい分うれしかった」(男)「『坊ちゃん』みたいに、読んでいて、こうふんするような小説がすきである。何回よんでもおもしろかった」(男)「大へんおもしろかった。いちいち手にとるようだった。」

(男)と無条件におもしろく思った者が大部分。「私はなんだか坊ちゃんのような人になりたいような気がする。とって、も男らしくして」(女)と女子も言っている。とくに、その正義観に手ばなしで拍手を送る。だから反対に、赤シヤツは「本当に女らしくして、いやらしい。赤いシヤツなんか着て。もっと教頭らしくすればいいのに」(女)と憤慨するわけである。又、英語教師うらなりは、「もっと自分の意見を主張するべきだと思う」「道理にある範囲で、自分が正しいと思ったら主張したらよい」(女)と批判される。

「坊ちゃん」を無条件にほめる者ばかりではない。「無鉄砲というものは損をするものだと思った」(男)「あまりにも無鉄砲すぎて、生がいのうちいくら損をするかわからなう。もう少し考えを持ったら良いと思う」(女)者。「せっかちで、かんしゃくもちで、そして頭のどこかぬけている所があるらしく、知恵がなう」(男)と手きびしいものもある。

又、「僕も気が短いので、以後気をつけねばいけなう」(男)と反省する者。さらには、「人間の心というものは本当に分らないものだ」(男)と、たった一行だけの感想をしたためた者もあった。

要するに、主人公の奔放な反俗精神と正義感が、いきいきとした文章によって描かれているので、中学生にとつて、もっとも、かっこうの小説というべきであろう。二十三名とい

う多くの者が読んだのも当然である。

「草枕」

「私には、どうも、この小説のどこがそんなにいいのかわからない。途中に、俳句などがでてきているが、それがいいのがあるのかと思ったり、よくもの想いにふけていて、その内容を書きつけているが、あれがいいのかと思ったりする。そして、これは、あまり頭に残っていない」(女)とか、「読後、何が何だかさっぱりわからなくなってしまいました」(女)「いみがよくわからなかった」(男)と、すべての者が、理解できなかったことを書いている。なぜ、わからないのか。表現のむずかしさは言うまでもないが、それだけではない。内容もわからないのだ。「非人情という言葉が使われている。どういうことなのか、わからない」(女)と言っているように、「出世間的非人情的」な漱石の思想は、具体的現実的な生徒たちには、所詮、無縁のものである。

もちろん、現実の生活、憎んだり憎まれたり、わずらわしい日常をいとう漱石の思想がわからないことはない。ただ、必ずしも、だからといって、そこからの脱出によってそれが救われるとは思えない。かれらは、もっと現実的であり、此岸的である。

ただ、「那美さんが茫然として久一さんの汽車を見送りました。其の茫然とした姿に、不思議にも今まで、かつて見たことのないク隣れが浮かんでいました。そこで、クそれ

だ、それだ、それが出れば絵になりますよ」と叫びました。ここにひどく感げきました」(女)と言ったものと、「私達も、こういう、物にとらわれない世界に住みたい」と思います」(女)と書いた者があった。

「吾輩は猫である」も、「まる」でマンガのようである」(男)と思ったり、「とても口ききが悪い」(女)と思ったり、「このねこも名前がらう、つけてもらったら、と思います」(女)と書いたりしてゐる程度で、その風刺について述べた者は一人もいない。

もっとも、それも無理はないかもしれない。「健全な娯楽的文章だ」といって当時の文壇からはほとんど認められなかった」(現代日本文学辞典)のであるから。「健全な娯楽性」をもつという点からだけみても、「草枕」よりはわかりやすい。しかし、この長編は決して読みやすいものではない。読みやすいものであれば、一学期に、教科書で学んだばかりだから、もっともっと多くの者が読んで然るべきである。

「これでも明治の有名な夏目漱石がかいたのだらうかと思うほど面白く、ばかばかり書いたことばかり書いてある」(男)というふうには、興味をそそられた者の中に、一人「凡ての安楽は困苦を通過せざるべからず」という猫の言葉がよかったです」(男)と、教訓的に感じとった点を書いた者があった。

○山本有三

漱石について、多く読まれてゐるものは山本有三である。

男子が七篇であるのに比して、女子の三篇は、とくに目立つことである。「路傍の石」を読んだ者、男子は三人にすぎないが、女子は十名である。「真実一路」は四名に対して七名、「兄弟」は二名と三名、「波」にいたっては、四名の女子に読まれ、男子は一名も読んでゐない。

しかも、有三の作品は、中学生にとつて、比較的読みやすいと見えて、「面白かった」と思つた者の比率が高い。これは、いうまでもなく、著者が主張し実践してきた国語国字問題」の効果的あらわれでもある。

「路傍の石」について、生徒の感想を聞いてみよう。「この本は非常に興味があった」(男)と言つる者が多く、「大きな心を持って、ちよつとこのことでへこたれず、次野先生に助けてもらいながら、すくすくのびる少年」(女)に心ひかれてゐる。「これから吾一が路傍の石に終わるか、それともりっぱに立ちあがるか、これはきつと立ちあがっていくと思う。が、何分封建性の強い当時の世の中であるから、苦難も多いと思う。吾一は、我一人」という意志の強い子だ。きつと路傍の石にはならぬと思う」(女)「かんなん、なんじを玉にす」ということばがよくあてはまる」(男)と思うのである。それとともに、「人間というものは、あたまがよくても、うまくなかないものもあるし、また、それと反たすのものもあるように、いいようにはいかなないものだ」(男)と、あきらめそうなききをもらしてゐる者もあった。

有三の「非運を克服して生きて行く意志の強さ」をもって「最善を尽くせば必ず救われる」という、理想主義的な信条は、たしかに、少年少女に勇気を与えてくれる。

だが、「この物語、なにかものたりないような感じがした」(女)と感想をしたためた女生徒があったが、はたして、なにが、ものたりなかったのでしょうか。有三の「微温的な人生観」の「解決に辿りつく過程には不自然な飛躍がある」という「文学的限界」(現代文学辞典)を、無意識のうち

に感じとったのであろうか。それは、わからなす。

以下、武者小路実篤、宮沢賢治、島崎藤村、志賀直哉、菊池寛、井伏鱒二、森鷗外等の主要作家(十篇以上、読まれてゐるもの)について、生徒が、いかに読んでゐるかについて簡潔に記したいが、紙面の都合で、別の機会にゆずりたい。あの程度は、右の表がこれを物語ってくれよう。

最後に是非とも、つけ加えておきたいことは、生徒たちが、どのような経路で、それらの本を読むに至ったかということである。

第二表の「なぜ読んだか」の数字が示すものである。「自分で読みたい」と思って求めた」という者が一四六で、うちじるしく多いという点に着目したい。すでに、この年齢になれば、自分で選択する能力をもっていると一応言えよう。だが、この選択というのも、きわめて複雑な要因をもつもので

あることは言うまでもない。映画・ラジオ等のマス・コミユニケーションの力の大きさはもちろんである。

注意しなければならぬ点は、「家にあつたから」というのが、「父母先生姉姉にすすめられたから」という六四をこえて八六もあるという事実である。

読書指導の必要性は、論ずるまでもないが、積極的に良書をすすめることの大切なのとかわりなく、消極的な意味での読書指導ともいふべき、家庭に良書をそなえることが考慮されなくてはならない。逆説的に言えば、身辺に良書があるというだけで、すでに、一段階の読書指導であることを物語っているのである。

— 広島大学付属福山中学校教諭 —